RITSUMEIKAN

さんしゃ Zapping

Vol.29　No.3（通巻 175 号）

2015 年 2 月

＜産社学会　ニューズレター＞

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL（075）465-8186　　E-mail: s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp

http://www.ritsumei.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/

〔目　　次〕

＜追悼　篠田武司先生＞

篠田武司先生のご逝去を悼む	有賀　郁敏	p. 2
追悼篠田武司先生（弔辞）	木田　融男	p. 4
早すぎる追悼	中谷　義和	p. 5
追悼：篠田先生	赤井　正二	p. 7
篠田先生との思い出	櫻井　純理	p. 8
篠田先生の思い出	ユイス・バユス	p. 9
篠田武司先生を偲んで	中里　裕美	p. 10
篠田武司先生を偲んで	嶋内　　健	p. 11
篠田先生のこと	西村　　毅	p. 13

〈追悼 篠田武司先生〉

篠田武司先生のご逝去を悼む

有賀　郁敏

故 篠田武司先生

この度の篠田武司先生の突然の訃報に接し、驚きとともに言葉では語りつくすことのできない深い悲しみにさいなまれています。先生、どうしてこんなに早く逝ってしまわれたのでしょうか。私は学部長である前に学部の同僚として、また先生を心から慕ってきた教員の一人として、本当につらく、平常心のままでいることができません。また、先生を失われたご家族のお気持ちを慮る時、心が痛みます。

篠田先生は立命館大学産業社会学部の教員として、教育、研究、行政のあらゆる領域で、常に先頭を切って奮闘してこられました。

教育の領域では、これまで実に多くの学生・院生を育てられ、社会の各方面へ輩出されました。先生の教育における学生・院生に対する態度は学問研究の厳しさに裏打ちされた凛としたものであり、同時に彼女・彼らの心情に寄り添うきめ細やかさを特徴としたものでした。講義やゼミで先生と接した学生・院生は、先生の厳しいながらも学生思いの温和なお人柄にひき付けられ、学問の世界へと導かれたと思います。篠田ゼミの希望者は常に多く、この事実にも先生の人となりの一端があらわれているのですが、先生から発せられる「どうなんだろう、なんですね」という独特の口調は、自身の学説を押し付けることなく、学生たちが己の思考を深めていくための導きの糸のような役割を果たしてきたのだと思います。先生のもとで育った卒業生や現役の学生らもまた、この度の先生のご逝去を心から残念に思っているにちがいありません。

研究の領域では、先生は夥しい数の著作や論文を刊行し、文字通り学界の第一線で活躍されました。日本を代表する社会科学者の一人、平田清明教授のもとで研究者への道を歩まれた篠田先生は、世界と日本の市民社会に内在する課題を深部から析出し、輝かしい研究成果を次々と発表されました。とりわけ福祉国家スウェーデンに関する緻密な分析をベ

ースとした日本の市民社会研究は、先生のご研究の白眉ともいうべき秀逸した成果であり、日本はもとより世界からも注目を集め、先生のもとで研究を志したい多くの学生たちが先生の研究室の門をたたきました。先生の市民社会論の軸心は、日本と世界の比較や差異化といった解釈にとどまらず、最終的には、すべての人びとが平和な世界で幸福かつ平等に生きていくことができる社会の実現にあったと、私は思っています。

行政の領域では、先生は1999年度から2001年度までの3年間、産業社会学部長・社会学研究科長として学部・大学院教学の発展のためにリーダシップを発揮されました。2学科制を軸とした産社の2000年カリキュラム改革は先生のご尽力なくして実現することはありえず、その意味で先生は今日の学部・大学院教学の発展の礎を築かれ、また学部長を退任された以降も、大所高所から改革議論を推進されました。私は2001年度に企画担当の副学部長として篠田学部長のもとで仕事をさせていただきましたが、先生はいつも穏やかな態度で私を叱咤激励して下さいました。先生の学部運営は実にしなやかであり、しかもすべての教員への気配りを忘れることなく、加えて、職員の方々の仕事に対する敬意を常に抱き教職協同を推し進められました。

以上、3つの領域について記してまいりましたが、先生の多大なご功績はこれだけで語りつくすことなどできません。

2015年は産業社会学部が創設されて50周年を迎えます。この50周年を先生とともに祝うことができないことが残念であり、悔しくてなりません。学生をこよなく愛された先生のことですから、沢山の卒業生がかつての学び舎を訪れて現役の学生たちとともに先生をとり囲み、和やかな同窓会を行ったに違いありません。本当に残念です。

篠田先生、わたしたちは今、学部・大学院の改革に向け、日々努力しています。そこでは先生が長年にわたり産社に注いでこられた情熱や思想、すなわち学生・院生を大切にし、彼女・彼らの学びと成長を促し、学問研究に真摯に取り組み、様々な課題を教員と職員が協力して解決していくことが原点であると思っています。先生の長きにわたるご尽力に恥じることのないよう、教職員が一丸となって学部・大学院教学の発展のために奮闘していくことをお誓いします。先生も天国の地から私たちの取り組みを見守って下さい。

最後になりましたが、篠田武司先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。先生本当にありがとうございました。

（本文は篠田先生のご葬儀の際にしたためました弔辞に若干の加筆を施したものです。）

追悼篠田武司先生（弔辞）

木田 融男

（本文は、昨年 11 月 15 日のご葬儀で故篠田先生に捧げさせていただきました私の弔辞を、短くして記載しております）

篠田先生の訃報に接する２週間前ころ、一人暮らしを始めていた私の体調が悪いことなどを聞いていただき、いつもそうなのですが先生は私の健康を心配して下さり、食事、運動、診療のことなど丁寧にご忠告下さったのに、逆に先生の方が急に逝ってしまわれるとは、どうしてこのようなことが起きるのでしょうか、やりきれない悔しさが拭えません。

先生との想い出の一つに、学部設立 30 周年記念の「産業社会の変容と市民社会の形成」と題する研究企画のことがありますが、折りにふれ先生について感じましたいくつかのことを振り返らせていただきます。（各研究内容は『産社論集』の 32 巻 4 号・1997、34 巻 1 号・1998、41 巻 1 号・2005 などに掲載）

一つには、「市民社会」が含む概念的多義性（規範・理念的か記述・分析的か、公共空間かヘゲモニーの争いかなど）、関連する学問分野の多様性（経済学、政治学、社会学など）があり、違う分野の様々な考え方の人により構成されていましたが、それぞれの特性を引きだしつつ研究を推進させていかれる篠田先生の人を包み込むお人柄を目にしました。市民社会については「自由、平等、連帯、エコロジーを原理とする諸アソシエーションの自律的・共同的な審議空間」と先生は定義されており、まさしく理想論的な規範・理念的概念の代表でしょうが、先生はこの定義に適う「市民社会」的スタイルを、協同で営む研究方法にも貫いておられたのだなと振り返ります。

二つには、先生は国際化について重要視されておられ、B. ジェソップ（政治学）や U. ベック（社会学）などの招聘にご尽力されたのですが、さらに研究以外でも、学部学生とアジアに毎年ゼミ旅行を実施されていましたし、海外の大学との学部間提携にも努力されておられ、私も夏にスウェーデンに同行させていただいた記憶が蘇ります。

三つには、篠田先生は研究者としての厳しさを備えておられました。当研究企画でも、院生等には翻訳などさせて業績化を促されましたし、私的なことで研究不能に陥っていた当時の私に、種々の討議が交わされたシンポジウムや研究会のまとめをし、ジェソップも参加した総括研究会での報告と討議を準備するよう言われ、そして論文執筆と公表化を後押しして下さったことは、今となりましては本当に先生に感謝の念を抱くものです。

四つには、産業社会学部は「現代社会の課題を諸学問の協同で総合的に解明する」という教学理念をもっていましたが、先生はその

具体化を実質化する必要性をよく口にしておられました。今は消えつつある立命館全体が目ざす「現代化、総合化、協同化」の学部版理念なのでしょうが、教育においても研究においてもなかなかその実現は容易くはありませんでした。けれども当企画のテーマは教員の研究だけではなく、院生・学生の教育にも教学理念の実践的なイメージを提供できる事業の可能性をもちますよ、と熱く語られる篠田先生のひたむきさに私も感心したのを覚えています。

最後ですが、当時の研究企画の論点の一つに、日本の「市民社会形成」の課題というものがありました。単なる欧米の後追いではなく「日本の顔をした市民社会」の創成こそが、今後の研究および実践目標なのではないかと語り合われたりしました。私はその時「日本の顔をした」市民社会そしてそこにおける人間としての市民像というものを、具体的にはイメージできないなと感じていました。欧米流の「市民社会」を語る日本の高名な研究者のなかに、ともすれば窺える「権威主義的」な匂いへの反発がそうさせたのかも知れませんが、このたび篠田先生のご逝去に接しましてよく考えますならば、「日本の顔をした市民」とは先生こそまさにそうだったのでは、と了解できるような気持ちになれるのです。

さて立命館は今、「民主主義の再生」を表明された法学部の吉田美喜夫新総長がその緒に着こうと苦労されていますが、ご葬儀についてメールしてきた私の友人が、「篠田先生も共に立命館を再生させていかれただろうに残念です」という気持ちを吐露していた、ということもつけ加えさせていただきます。

篠田先生、どうか安らかにお眠り下さい。そして篠田先生の暖かいまなざしで学部や立命館の行く末を、お見守り下さることをお願いいたします。

早すぎる追悼

名誉教授　中谷 義和
（元 法学部）

篠田教授の悲報は 11 月 14 日の朝に届いた。驚愕のあまり，にわかには信じ難く呆然とした。というのも，数日前の夕刻に，キャンパスの路上で会っていたからである。「さようなら」と交わした言葉が，今も，耳についている。

所属学部を異にしていたこともあり，それほど古くからの交流があったわけではないが，仄聞にせよ声望は高かった。だが，「人文研」のプロジェクトで研究会を共にし、あるいは、少時を特任教授の研究室で同室するようになってからは，友人関係を深くし，その人柄の

温かみを実感することになった。この研究チームは，前身を含めると，ほぼ 15 年に及ぶのではないかと思われる。その間に，彼は同研究所の所長を務めているだけでなく，研究叢書の一環として共編著『グローバル化とリージョナリズム』（2009 年）を残している。

追想となると思い出は尽きないが，研究会を介した交友に触れないわけにはいかない。とりわけ，「人文研」の研究チームを同じくするなかで多くの思い出を残してくれている。このチームは「グローバル化」における「国家」と「地域」の変容の比較研究を主軸としている。彼の専攻がスウェーデンの福祉体制であり，ストックホルムを始め北欧の各地を，ほとんど毎夏に尋ねていた。本研究会では，この地域の現状について多くの多角的で理論的成果を報告しているだけでなく，中心的役割を務めてもいた。また，このチームの企画のひとつが本学をハブとする国際的シンポの開催にあり，ランカスター大学（英），暨南大学（中国），中央大学（韓国）を定例の参加校としている。彼は，その企画と開催準備や実行のリーダーとなり，信望の高さは運営にも反映されて，極めて友好的で生産的シンポを重ねることができた。

この「国際シンポ」は第 1 回を本学で開催し，その後，持ち回りで運営されていることもあり，ランカスター，広州，ソウルへ同道している。ランカスター大学を訪ねた折には，同大学のジェソップ教授の運転で浅春の湖沼地帯の観光を共にし，また，暨南大学と中央大学での学会の折には，「中山（孫文）記念館」やソウル旧市街地を一緒に訪ねている。その思い出は深いし，宿舎では恩師の平田清明さん（当時，名古屋大学）から学生時代に受けた薫陶を熱く語ってくれ，「市民社会」論をめぐって意見を交わしたことが印象深く残っている。

この「国際シンポジウム」は来る 3 月 14～15 日に本学で開催されることになっている。彼はその企画を練り，招聘者との折衝にもあたっていた。その矢先の訃報であっただけに，開催形態の変更を迫られることになった。だが，チーム員は彼の遺志を継ぐべきであると固い意志をもって開催に同意した。また，訃報を伝えたジェソップ教授からは，ドイツでの研究会への出席を調整し，報告者として来校したい旨の連絡を受け取っただけでなく，本シンポによって連携を深くしていた海外の研究者からも，追悼のメッセージとともに出席の連絡を受けた。そこで，本チームは，彼が学部長を務めた産業社会学部の配慮と協力を得て，次回のシンポを同学部の「創立 50 周年記念」企画に組み込み、「人文研」との共催による追悼研究会として実施することにした。そして，彼を編者として，この国際シンポの積年の成果を公刊することが連携大学で申し合わされていただけに，この企画を実現すべく、来春を目途に公刊することにしている。

追憶は尽きないし，心残りも多い。思い出の余韻は深く強いし，無念の感も禁じえない。瞼で涙をこらえて深い追悼の意を表する。合掌（2015 年 2 月 8 日）

追悼：篠田先生

赤井 正二

篠田先生は、さわやかな方でした。先生とは学部行政や市民社会論の共同研究など何かにつけて、よく話しする機会がありました。共研、執行部室、それぞれの研究室、カルム、土佐屋、居酒屋、いろいろな場所で話ししました。先生との話しはいつも気持ちよく実りのあるものでした。何か隠れた意図を感じさせたり、腹を探ったり、はぐらかしたりということは全くなくて、まして、つまらない冗談を言ったり、自分をえらく見せたり、ひとを「いじる」ということなど無縁な方でした。当たり前のことかもしれませんが、残念なことに、年を重ねると、そういうことはとても珍しいことなのだということが分かってきます。先生のお話は全てそのまま受け取ることができました。わざと極端なことをいうと、きっちりツッコミが返ってきました。社会のこと、研究のこと、大学のこと、学部のこと、ゼミや講義のこと、それからご家族のこと、先生との言葉のキャッチボールはいつも心地よく、かならず何かが残りました。

先生が学部長をされたときの学部懇親会は先生による詩の朗読から始まりました。茨木のり子さんなどの詩だったと思いますが、感動しました。今になって、そのような上品な時間がいかに得がたいものであったか、いかに幸福な時間であったかと思わずにはいられません。

平田清明氏の弟子をもって任じられておられました。篠田先生が「先生」といえばそれは平田清明氏のことでした。平田先生のお人柄は存じ上げませんが、組織や権威に寄りかかるのでなく、まして期限切れの肩書きにしがみつくのでなく、事柄に即して自分の頭で考え行動することをなにより重視するリベラルな姿勢は、平田先生と共鳴するものであったのでしょう。その姿勢のために若い頃は損することもあったかと思いますが、結果として大切な役割を担うことになったと思います。先生がピケティをどのように読まれたか、そんなことはもう伺えないのですね。

先生が特任になられてから、お話しする機会は減ってしまいましたが、特任になられてしばらくして、「いつまでやられるのですか」と尋ねたとき、授業しているかぎりいい時期に旅行できないと奥様にもいわれている、といったことをおっしゃられていました。まだまだたくさんしたいことがあったことでしょう。わたしもそのうち鍋の会に入れてもらいたかったです。自分の身の処し方も考えずにはおられません。先生の、さわやかさも、上品さも、リベラルな姿勢も、わたしは尊敬しておりました。傷心に堪えません。

※1 月 19 日に、加藤直樹先生の訃報が届きました。先に産社に赴任していた私に、直樹先生の方から親しく声をかけて頂きました。私が院生の時に一時参加させて頂いたゼミの先生が直樹先生の弟さんだったこともあって、はじめから旧知のように、気の置けない話をさせていただきました。いろいろ相談に乗って頂くことも多くありました。寂しさが一層つのります。

篠田先生との思い出

櫻井 純理

まさかこんなに早く、こんな形で篠田先生とお別れする日が来るとは思ってもみませんでした。何も先生にお返しできなかった。感謝の言葉ひとつまともに伝えることもしないまま、先生が突然いなくなってしまった。今、後悔の気持ちばかりです。

先生と出会ったのは20年ほど前、私が大学院生の時でした。指導教員が特任教授になられたときに、実質的な研究指導の役割を引き受けて下さったのが篠田先生でした。今思えば、よその研究科で30歳を超えた、進路もハッキリしない院生をよく受け入れて下さったものです。

その後、篠田先生が代表をされていた科研調査で、何度もスウェーデンに連れていっていただきました。労働組合、民間企業、地方自治体等々、様々なところの見学やインタビューに参加させていただけたのは、本当に得難い経験でした。共同調査ではソリの合わない先生同士が激しく口論されたり、「今日は白いご飯が食べたい」と譲らない先生がいたり、いくら督促しても報告書の原稿を送ってこない先生がいたりで、篠田先生もいろいろご苦労されたと思います。

でも、先生はどんなこともふんわりと受け止めて、チームをまとめ、成果をまとめておられました。本当に寛容で懐が深く、だからこそ私も含めて、多様な学生・院生や研究者が先生の周りに集まってきたし、楽しく研究し、安心して一緒に働くことができたのだと思います。

昨年、2014年2月に韓国中央大学で行われたシンポジウムでの共同発表が、先生とご一緒した最後の仕事になってしまいました。その数か月前に修学館の前で出会った際、「今、雇用で何が一番問題だと思っていますか？」と尋ねられました。それが「一緒に報告しましょう」というお誘いでした。十分な打ち合わせもできないまま迎えた報告の本番では、時間が足りなくなってしまって、すごく焦ったことを思い出します。

報告が終わった夜は中谷先生（法学部）の部屋に集合して、缶詰やスナック菓子をつまみに、松下先生（国際関係学部）、篠田先生と4人、焼酎で乾杯しました。あの時の写真を見ると、先生はグラスを片手にベッドの上に座っていて、ほろ酔いの優しい表情をされています。

最後にお会いしたのは、先生が倒れられた2日前、コピー機のところでバッタリ出会っての立ち話でした。先生は総長選挙の結果のことを話され、「これからが大事だね」と言われていました。そういえば、私の常勤での採用が決まったあと、先生からいただいた年賀状には、手書きの文字で「産社をよろしく」と書かれていました。篠田先生はそんなふう

に、いつも学部の将来や大学の将来のことを気にかけておられたのだと思います。

先生のような師に巡り合い、一緒に仕事をさせていただけたことは、本当に幸せなことでした。篠田先生、心から、ありがとうございました。

篠田先生の思い出

ユイス・バユス
（京都外国語大学）

11 月 14 日、後輩から篠田先生が亡くなったというメールが届きました。あまりにもびっくりして、あまりにも信じ難くて、内容を確かめるために何回もメールを読み返しました。その後、研究仲間の先生や知り合いの学生からも同様の電話やメールがきました。「4ヶ月前に食事を一緒したとき先生は元気にいろいろな話をしてくれたのに…」と考えながら現実を受け止めました。

先生と最後に会ったとき、先生は奥様と行った楽しかったスペイン旅行のことや学生たちと一緒に行った韓国やスウェーデンの出張について嬉しそうに語ってくれました。また、これからの研究についても熱心に話してくれました。相変わらず、とても元気そうで、だんだん若くなっていると思わせる姿でした。そして、きまって「ところでパエリャをいつ作ってくれる？」と問いを私に投げてくるのでした。

篠田先生と初めて会ったのは 1996 年夏のある暑い日でした。もともと指導教員になるはずであった先生が、私の研究テーマを聴いて、篠田先生のほうが相応しいと紹介してくれたのでした。それから研究生として、また大学院生として篠田先生のゼミに入って指導を受けるようになりました。大学院生として私の日本での研究活動の本番がスタートしたのでした。ゼミは院生 3・4 人が各自のテーマに関する論文を読んで、その内容について発表して、皆で議論するという進め方でした。そこでは、私の下手な日本語に配慮してわかりやすい日本語で丁寧に説明してくれたり、また英語で頑張って議論してくれたり、とても助かりました。研究がなかなか進まないとき、落胆のとき、「さあ、この立場から見たら面白いじゃない？」「あの立場から考えたらどう？」と熱心にアドバイスをしていつも大学院生たちを優しく励ましてくれました。またプライベートの生活面でも、私が部屋を借りるときに、先生は保証人になってくださり、本当にお世話になりました。ゼミの後はいつも飲み会でしたが、居酒屋でいろいろな

料理を食べながら、またビールを飲みながら、社会学理論についての深刻な研究の話だけでなく先生の夢であった映画監督になりたかったことや恋愛などについての話でもりあがりました。先生は気楽に大学院生と交流しゼミの飲み会も暖かい思い出になっています。そして、いつものように先生は「ところでパエリャをいつ作ってくれる？」と質問をしてくるのでした。

大学院を修了してからも、仕事や研究について先生のアドバイスをいただくなどで付き合いが続いていました。いつか作ろうと思いながら、とうとう先生にパエリャを作ってあげられなくなってしまいました。残念です

篠田武司先生を偲んで

中里 裕美
（明治大学）

何だか未だ本当のような気がしない。篠田先生とは 11 月 8 日に立教大学で開催された北ヨーロッパ学会において近況を話し、「では、また。」という言葉を交わしたばかりだった・・・。また翌日に「・・・(略)・・・情報、いろいろ、伝えます。頑張り過ぎないように、自愛して下さい。」という返信を頂いたばかりだった・・・。

篠田先生との最初の出会いは、私が政策科学研究科修士課程の 2 年生のときで、スウェーデン・セーデルテルン大学への交換留学が決定した直後のことだった。ちょうど同じ時期に篠田先生は在外研究でストックホルムに滞在されることになっており、国際課を通じてスウェーデンに留学する私たち2名の学生（もうひとりは産社の学部生）に「スウェーデンに出発する前に、よかったら昼食でも一緒にどうですか？」という趣旨のメールを頂いたことがきっかけだった。他研究科の学生である私にも、わざわざ声を掛けてくださるというのは、一体どんな先生なんだろうか・・・。しかし、お会いしてすぐに篠田先生の温かいお人柄がわかった。

この渡航前の昼食会という篠田先生の素敵なアレンジメントのお陰で、私たちはスウェーデン滞在中も先生に幾度となく夕食に連れて行ってもらうことになり、それぞれの近況を交換して楽しくかつ充実した時間を過ごすことができた。（いつだったか、先生のお宅で前日から煮込んでいるというお手製のカレーライスをご馳走になったこともあった。）また滞在中には、先生の科研研究プロジェクトの調査に飛び入り参加させて頂き、留学先の授業を受講しただけでは得られないスウェ

ーデン社会の〈現状〉を学ばせてもらうという大変有り難い機会を与えてくださった。これらは今の私の財産になっている。

その後、このスウェーデンでのご縁がきっかけで、社会学研究科博士課程の篠田先生のゼミに正式にお世話になり、篠田先生のご指導のもと博士学位論文を執筆し、完成させることができた。その過程では、（私はなかなか頑固者なので）篠田先生とは互いに譲らない議論を重ねることもあったが、議論が終われば先生はどんなことがあっても私の方向を後押ししてくれる先生だった。そんな篠田先生の人間的な温かさと包容力、寛大さには感謝してもしきれない。

また篠田先生は、私が東京で職を得たため住み慣れた京都を離れてからは、定期的に、ご自身が執筆されたた論文や著書、いろいろな記事などを、「手書きの一筆箋」を添えて送付してくださっていた。そこに書かれていた言葉にどれだけ励まされていたことだろうか・・・。

ふりかえってみると、篠田先生は直接的ではないが、このような陰の、温かい励ましを常にかけつづけていてくれ、その励ましは幾度となく私を支えてくれたように感じている。篠田先生、本当にありがとうございました。スウェーデンという地が結んでくれた篠田先生とのご縁。先生の遺思を受け継げるような人間として、研究者・教育者としてこれからも精進し続ける所存です。篠田先生、どうぞお導き下さい。篠田武司先生のご冥福をお祈りいたします。

篠田武司先生を偲んで

嶋内 健
（本学 非常勤講師）

篠田先生が 2014 年 11 月 13 日にご逝去されました。亡くなられる数日前に東京の学会で元気に報告をされていたので、誰もが驚いたことと思います。私は学会を欠席したので、産社共研で 50 周年記念本の打ち合わせがあった 9 月 29 日が、先生との最後の会話になってしまいました。

私が篠田先生と初めてお会いしたのは、2006 年の 11 月でした。立命館で開催された北ヨーロッパ学会のお手伝いをしたときだったと思います。当時の私は博士後期課程への進学を希望していたのですが、受け入れ先がなかなか見つからず困惑している最中でした。そんなとき、ある人の仲介で幸運にも先生と出会うことができました。後日、先生に相談したところ院生として拾ってもらうことにな

りました。そのときにかけていただいた言葉を、今でもはっきりと覚えています。
「嶋内くん、経済学は思想ですよ。」
「一緒に勉強しましょう。こちらもあなたから勉強させてもらいます。」

受け入れに先だってこれまでの研究歴、今後の研究計画を聞いていただいたときのことでした。もともと福祉制度に埋め込まれた理念や思想の変容に関心があった私にとって、この言葉は大きな勇気となりました。なにより自分の研究テーマに関心を抱いてもらったことが、当時の私にとって大きな喜びでした。このような経緯で私は篠田ゼミの門をくぐることになりました。

それから8年間のつきあいでした。色々な場面でさまざまな教えを受けました。私はD1 の冬に、在外研究していたヴェクショーからストックホルムに向かい、ワークライフバランスの調査で先生と合流しました。そのとき私は調査に対する積極性が足りないと厳しく叱られました。以来、私は先生と調査に同行するのが恐ろしかったのですが杞憂でした。後にも先にも先生に叱責されたのは、結局この1回限りでした。あれから何度も調査でご一緒しました。オランダや私のフィールドのデンマークで調査をしたこともありました。昨夏はルンド大学でのセミナーや、コペンハーゲンでの調査で一緒になりました。

篠田先生は夏の調査が終わると9月はじめに帰国し、そのわずか2週間後、今度はアジア諸国へゼミ旅行に出かけるというのが毎年の慣例となっていました。昨年はインドネシア、一昨年はインドを訪問したようです。定年をとうに過ぎているのに、なんという体力と行動力。その活力はどこから湧いてくるのかと驚くばかりでした。ときに篠田先生は東日本大震災の直後、被災地を見にいったそうです。凄惨な光景を目の当たりにした先生は、「悲しくなった」と語ってくれましたが、その行動ぶりは恩師の平田清明先生と似ています。平田先生もまた、阪神淡路大震災の直後に鹿児島から焼け野原となった神戸の街を見にいきました。平田先生の行動力を最も継承しているのが篠田先生だという話を、同門の先輩にあたる先生から聞いたことがあります。先生は平田先生のことを、たいへん尊敬していました。平田先生との出会いが、ご自身の人生を変えたと書いているくらいです。もしかしたら、先生の原動力は偉大な師に近づきたいという思いから生じたものだったのかもしれません。

先生はいつも突然でした。前触れなく突然昼飯に誘う、海外ゲストの迎えを突然頼んでくる等いろいろありました。ある日、開講日の1週間前に電話で「『社会ガバナンス論』、やってくれないか」と突然の依頼をされました。断れるはずもなく引き受けたのですが、1年目の授業準備は本当に大変でした。この科目はおそらく他大学には設置されていないでしょう。したがって、その独自性ゆえに内容の組み立てには今でも苦労をしています。それでも少しでも「自分の科目」にしようと、私なりに勉強を重ねながら改良を続けてきました。そして、昨年の旅立ちも突然でした。私はまたしても、授業を突然引き受けることになりました。先生の3回生、4回生のゼミです。しかし、恩師のゼミを引き継いだことを、たいへん誇らしく感じています。私に声をかけてくださった現代社会専攻の先生方には感謝しております。4回生とは、わずか2

カ月間のつきあいでしたが、留学経験者がクラスの３分の１もいて、多様なテーマに取り組むひた向きな学生たちと時間を共有できたことは、私にとって忘れ難い経験になりました。このクラスに出会ったことにとても感謝しています。

間もなく桜の季節がやってきます。来年度は、また違う個性をもった新４回生がいます。春風吹くキャンパスで彼ら／彼女らと勉強するのも、また大きな楽しみであります。篠田先生には、いろいろな経験をさせてもらいました。最後の篠田ゼミ生を社会に送り出すことは、先生へのせめてもの恩返しだと思い取り組んでゆく所存です。最後になりましたが、篠田先生、本当にありがとうございました。

篠田先生のこと

西村 毅

私が篠田先生に初めてお会いしたのは、2008 年 6 月末日だった。天のインスピレーションによって、監査役機能に関する論文を書き上げたいという思いが募り、ガバナンスに関する知見を得るべく大学院で勉強したいというお願いに参上した。

先生は、私の願いを聞き終えられるや、持参した私の論文にちらちらと目を通され、その場で、次のような結論を出して頂いた。

「よろしいでしょう。ぜひうちにいらっしゃい」「しかし、私は社会学の勉強を何もしていませんので、学部からの入学を考えているのですが」「あなたにはそんな必要はありません。来春、修士課程に入学しなさい」

当時、勤務していた京セラ子会社の監査役任務は１年有余の任期を残していたが、スムーズに修士課程になじめるよう、入学前に産業社会学部の聴講生として勉強しようと、９月末の辞任を決意した。激しい夕立の中、先生の温かく優しい言葉は、私の心の中に一条の光を射してくれた。

それから５年余り、先生を指導教授と仰いで、修士から博士課程の道を歩んだ。41 年の社会人経験を積んで、改めて大学院の門をくぐった私の存在は、先生にはどのように映っていたのだろうか。

それまでの人生を通じて、「独立自尊」を信条とし、自分のことは自分で責任を持つべしと考えてきた私には、個人の領域にも社会全体が連帯して責任を持とうとする社会学の

基本的な理念は、なかなか受け入れられなかった。

しかし、理解できないことは質問するほかない。少人数のゼミなどでも、私は遠慮なく質問を繰り返したが、先生は嫌な顔一つせず、丁寧に答えて下さった。温厚な先生の語り口は、社会学の大家にふさわしい風格を備えておられた。

先生に一番ご迷惑をおかけしたのは、博士論文について、3年を超えて熱心にご指導頂いたのに、私の力不足から、合格しないまま、申請を取り下げたことであった。この背景には、体調が悪化する中で、自分としては、博士号よりも、監査役本の出版を優先したいという事情があった。先生からは、あともう少しなのだから、と引き留めていただいたが、博論の研究成果をベースに『監査役で会社は変わる』を出版でき、先生からもお褒めの言葉を頂いたことが、せめてものご恩返しになった。

先生と最後にお会いしたのは、2013年12月11日、大丸東京店の喫茶店であった。この時、第二作として『フリーダム経営』の出版を考えていると、内容の構想を申し上げたところ、それは面白い、と激励していただいた。その出版はほぼ1年後に実現したが、先生にご覧いただくには僅かに間に合わなかった。返す返すも残念という他ない。

この時、先生が東京に来られたのは、スウェーデンで活躍しておられた日本人女性が急逝され、そのお別れの会に出席するためであった。「今年の夏にお会いした時には、本当にお元気だったのに」と故人を偲ばれるお顔は、先生らしい人を大切にする誠実な表情に溢れていた。

その先生がまた、突然お亡くなりになるとは･･･。

先生に哀悼の意を表するとともに、いずれあの世でお会いした時に、その後の成果について報告すべきことをまとめておきたいと思ってる。

お知らせ 1

※2014年度末を迎えるにあたり以下のお知らせをいたします。期限厳守でお願いいたします。

〇個人研究費執行の証憑提出〆切り: 3月9日(月)

〇産社学会プロジェクト研究助成費決算報告書類の提出〆切り:

①戻入金がある場合: 3月10日(火) ②戻入金のない場合: 3月20日(金)

お知らせ 2

※産業社会学部共同研究室の職員紹介です。よろしくお願いします。

〇2月1日～3月末　鈴木若菜さん（教員研究室整備業務担当）

〇3月1日～　　鈴木永祐さん（産社･法･国際共同研究室業務統括担当）